

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 高松城外堀跡周辺を訪ねる

講師 大嶋 和則

(高松市文化財専門員)

平成27年9月27日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

1 史跡高松城跡

しせきたかまつじょうあと

天正一五年（一五八七）に豊臣秀吉から讃岐一国を与えられた生駒親正は、翌一六年（一五八八）から香東郡野原郷において築城を開始しました。親正は築城に際し、地名を高松に改めました。

北は瀬戸内海に面し、内堀・中堀・外堀の三重の堀で残り三方を取り囲んだ平城（水城）で、その縄張り（設計）は黒田孝高よしたか（如水じよすい）・藤堂高虎・細川忠興などの諸説があります。高松城は玉藻城とも呼ばれていますが、讃岐の国の枕詞「玉藻よし」に由来すると言われています。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは、親正は石田三成に味方しますが、子の一正かずまさは徳川家康に味方したことから、讃岐国十七万八〇〇石余は改めて一正に与えられ、慶長七年（一六〇二）から高松城を居城としました。生駒家の治世は寛永一七年（一六四〇）まで四代五十四年間におよびましたが、寛永一七年（一六四〇）に生駒騒動と呼ばれる家臣団同士による対立が生じ、領地を没収され、出羽国矢島一万石に移されました。

その後、寛永一九年（一六四二）に松平頼重に東讃十二万石が与えられました。頼

重は徳川家康の孫で、徳川光圀（水戸黄門）の兄にあたり、西国大名の監察役を命じられたとも言われています。また光圀は兄を差し置いて水戸徳川家を継いだことを悔いて、頼重の子綱条つなえだを水戸徳川家に迎え、実子頼常よりつねを頼重の養子としました。これ以後、幕末まで高松松平家は水戸徳川家と養子縁組を繰り返していききました。

頼重は入部三年目の寛永二十一年（一六四四）に高松城の改修をはじめ、寛文一〇年（一六七〇）に天守を改築し、翌年から東の丸、北の丸を新造しました。それを引き継いだ二代藩主頼常は月見櫓（着見櫓）や良櫓などを建てました。こ

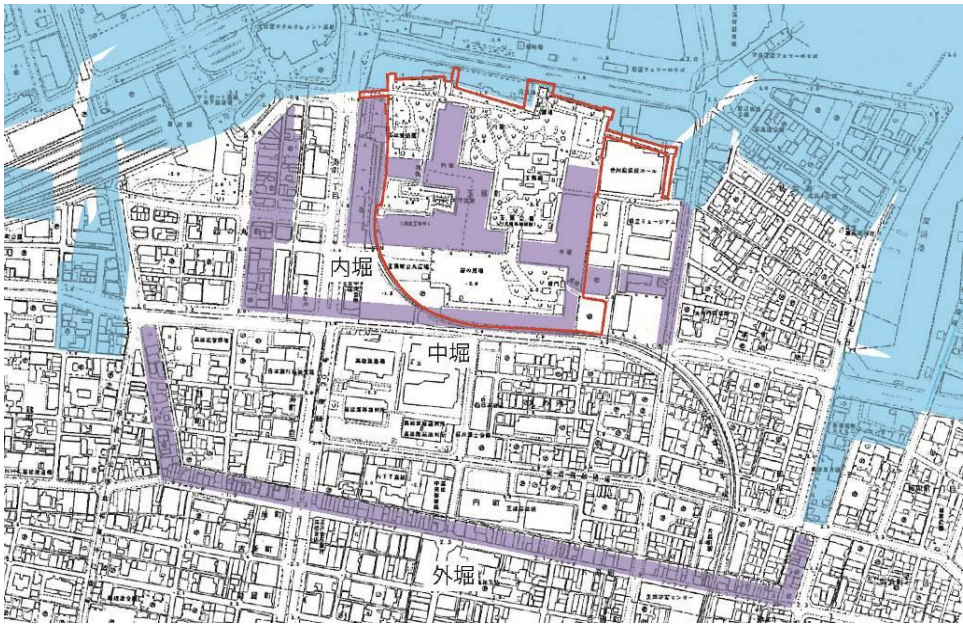


図1 かつての高松城と史跡指定範囲

これらの改修に伴い大手を南側から東側に移動し、三の丸に御殿を建てました。その後、城は大きな改変は行われず、十一代にわたって松平氏の居城となっていました。慶応四年（一八六八）に官軍に開城することとなりました。

明治時代には城の中心部は陸軍の所有となり、天守をはじめとする多くの建物が取り壊されるとともに、外堀や海が埋め立てられ市街化が進みました。城の中心部は明治二三年（一八九〇）に再び松平家に払い下げとなり、天守台に藩祖頼重を祀る玉藻廟、三の丸に松平家の別邸として披雲閣が建築されました。昭和二〇年（一九四五）には戦災で桜御門が焼失しましたが、昭和二二年（一九四七）に良櫓など四棟が国の重要文化財に指定されました。昭和二九年（一九五四）には城跡は高松市の所有となり、翌三〇年（一九五五）に国の史跡に指定されるとともに、玉藻公園として一般に公開され、市民に親しまれています。さらに、平成二四年（二〇一二）には披雲閣（旧松平家高松別邸）の三棟が国の重要文化財に、翌二五年（二〇一三）には披雲閣庭園が国の名勝に指定されています。これにより、高松城跡は史跡・名勝・重要文化財の三重指定となりました。

2 内堀

現在緑地帯として整備されている一帯は、かつて高松城の本丸と二の丸を囲むように設けられた内堀の跡です。特に、本丸はこの内堀によって四方を囲まれており、鞆橋さやばしのみで二の丸とつながっていました。大正時代まではその姿をとどめていましたが、大正一四年（一九二五）に完成した皇太子殿下御成婚記念道路の建設に伴い、本丸西側が埋め立てられ堀幅が狭くなりました。昭和三年（一九二八）には埋め立てられた内堀を含む高松城跡の西側一帯において全国産業博覧会が行われました。さらに戦後には本丸西側は完全に埋め立てられてしまいました。

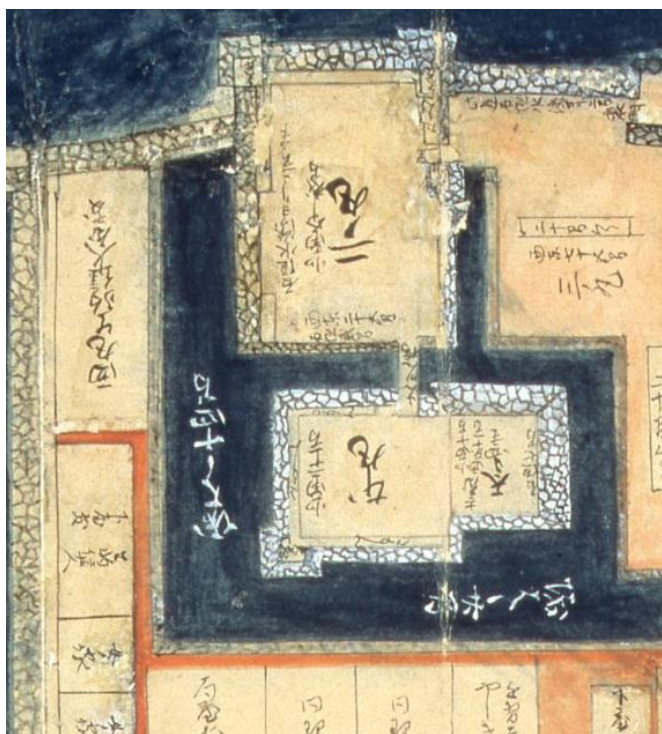


図2 『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（高松市歴史資料館蔵）に記載された堀幅

内堀のうち本丸西側部分の堀幅は絵図や文献によって異なり詳細は不明ですが、寛永一五〜一六年（一六三八〜三九）頃の絵図では一四間と最も狭い幅が記載されており、少なくとも二五m余りあったと考えられます。

3 無量壽院跡

むりょうじゆいんあと

江戸時代には高松城の西の丸に位置し、うまや 厩薬園、学問所、こうしんかく 考信閣（歴史編纂に関する部署）など時代によってさまざまな使われ方をしていたようです。発掘調査では江戸時代の遺構も見つかりましたが、その下層において中世の遺構が検出されました。特に、調査区中央部で発見された東西方向の溝からは一六世紀のものと考えられる土器や瓦などが多量に出土しました。その中には「野原濱村无量壽院」（注：「无」は「無」の異体文字）と刻



図3 無量壽院跡発掘調査状況（西から）

まれた瓦や梵字瓦がありました。また、中国から輸入された青磁の香炉や五輪塔も出土しました。これにより、調査地が香川県屈指の古刹である「無量壽院」の跡地であることがわかりました。

無量壽院は高松市御坊町にある寺院であり、真言宗御室派に属し、紫山しざん随願寺ずいがんじと号します。京都仁和寺の末寺で、付近の多聞寺・西福寺など六ヶ寺を末寺としていました。天平十一年（七三九）に行基が坂田郷室山の麓に創建し、その後空海が修造し、七談議所だんぎしよの一つとしてその伽藍がらんは莊嚴であったと言われています。白川法皇・龜山天皇は厚く信仰し、伽藍再興により更に興隆したと言われています。

応永十九年（一四二二）の『北野天満宮一切経いっさいききょう』には「讚州野原無量壽院住善海」の名がみえ、その奥書には野原無量壽院・野原西浜極楽寺・野原福成寺などの寺院名が散見できます。また、藤原親長の日記である『親長卿記』文明五年（一四七三）三月二四日条に無量壽院の記載があります。

天文年間（一五三二～一五五五）に戦火で伽藍が焼失し、寺は八輪島（現在の高松城付近）に移転しました。調査で出土した文字瓦はこの時期のものであり、調査地が無量壽院跡であることがわかりました。

天正一六年（一五八八）に生駒親正が高松城を築城するに際し、寺は西の方（浜ノ町）に移転しました。しかし、明暦二年（一六五六）に御船蔵を作るために中村（現在の中央公園の南側）に移転しました。さらに、寛文七年（一六六七）に藩の長屋を作るために御坊町に移転し、現在に至っています。

4 中堀と西新門

高松城は本丸と二の丸を囲む内堀、城の中核部分を囲む中堀、さらにその外側の武家屋敷が建ち並ぶ範囲を囲む外堀の三重の堀が巡らされていました。明治以降、外堀から徐々に埋め立てが進み、現在は内堀と中堀の一部が堀として残っています。このうち中堀については、玉藻公園の東側と南側の一部が残っています。

城の中核部に入る門としては、東側の入口として東御門（旭門）、西側からの入り口として西新門がありました。

5 中世の港町「野原」

のほら

高松城築城以前の高松城周辺の様子については、『南海通記』なんかいつうき卷廿の記述が有名です。

西側と東側に海が湾入しており、その間の砂州（陸地）が海に向かって突き出す様子が、あたかも一筋の矢のようであり、そのため笹原（野原）郷と称され、郷内には、「西浜」^{ひがしはま}「東浜」という漁村があったと記載されています。

一方、応永一九年（一四一二）の『北野天満宮一切経』^{いっさいききょう}の奥書に野原の寺院として無量壽院・極楽寺・福成寺が見られることから、野原に寺院が多く所在していたことがうかがえます。

また、文安二年（一四四五）の『兵庫北関入船納帳』^{ひょうごきたせきいりふねのうちよう}には野原を船籍地とした船がみられ、発掘調査でも現在のJR高松駅周辺で、中世前半の港湾関連施設が検出されているほか、現在の琴電片原町駅東側もその可能性が指摘されています。さらに、



図4 中世後半の高松の地形復元図
（香川県歴史博物館 2007 から転載）

『南海通記』によると野原の領主層として香西氏旗下の真部まなべ、楠川くすかわ、雑賀さいが、唐人からと、片山かたやま、仲なか、岡田おかだ、藤井ふじいといった人名が挙げられています。以上から、築城以前の高松城周辺は多くの寺院や小領主を抱えることができるだけの経済的基盤を有した港町「野原」であったと考えられ、地域の中心機能を果たしていたと考えられています。

6 外堀

高松城の外堀は、現在の東浜港が北東部、片原町と兵庫町が南側、高松駅が北西部にあたり、かつての高松城が広大な面積（約六十六万平方メートル）であったことがうかがえます。外堀の北東部は商船等が出入りする商業港として、北西部は藩の船の停泊港として利用されていました。

7 報時鐘ほうじしよ

高松城では城内の太鼓を打って城下の人々に時を知らせていましたが、城下町の拡張により、それでは間に合わなくなったため、松平頼重は承応二年（一六五三）に城下の人々に時を知らせるために大坂で鐘を鋳させました。その際に大判三〇枚を加えたとされ

ます。当初稲田氏の屋敷に近い外堀西南の土手に鐘楼を設けていたことが絵図からうかがえます。その後、一番丁（現材の錦町一丁目付近）に移されました。廃藩とともに鐘の音は止まっていたましたが、明治三三年（一九〇〇）に四番丁尋常小学校の綾田桃三校長により同校内に鐘楼を再興しました。昭和三年（一九二八）一月の市庁舎のサイレン設置まで高松市の名物として市民に懐かしい響きを伝えていました。その後、玉藻公園披雲閣の庭に保存されていましたが、昭和五五年（一九八〇）に高松市の市政施行九〇周年を迎えることを記念して城北側に建物を復興して、鐘を納めています。

8 やくも 八雲橋

江戸時代、外敵の侵入から城を守るため、外堀にはほとんど橋がありませんでした。



図5 報時鐘

しかし、明治時代になると役目を終え、堀は埋立てられるとともに、行き来しやすいように橋が架けられました。八雲橋も明治一二年（一八七九）、現在地の北西約四〇メートル付近に架けられました。当時付近には出雲大社分院があり、多くの人がこの橋を渡って参拝していたそうです。名前の由来も、出雲の枕ことば「八雲立つ」から付けられたといわれています。明治三三年（一九〇〇）、外堀は埋め立てられ、八雲橋も壊されました。

それから約一〇〇年の歳月が流れた平成五年（一九九三）、土中から見つかった一本の橋の親柱を用いてモニュメントが造られました。

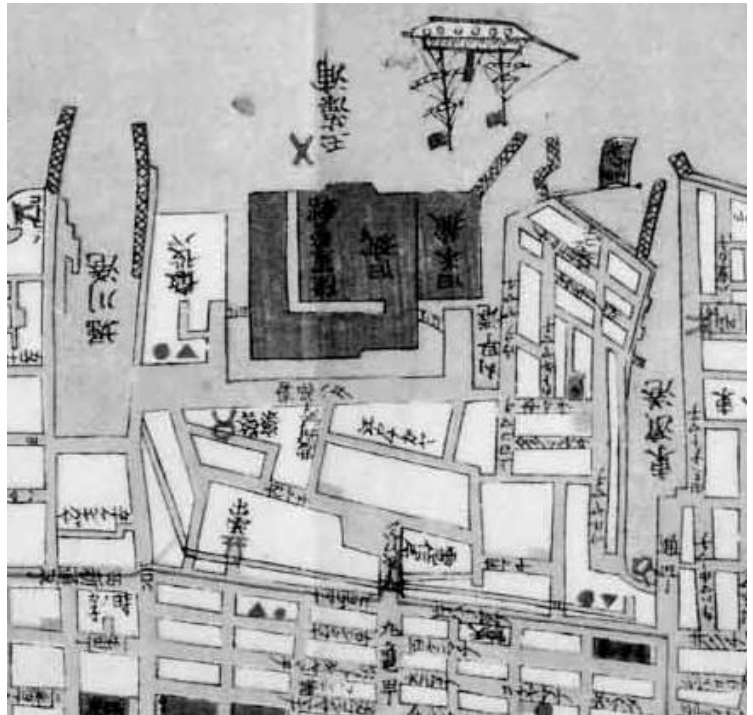


図6 「出雲」の記載が見られる明治14年の地図

9 高松市道路元標 げんびょう

大正八年（一九一九）に道路の管理や建設などに関して道路法が制定され、香川県における国道は、高松から徳島へ向かう二二号と高知へ向かう二三号、松山へ向かう二四号がありました。当時は、市町村ごとに道路の里程（距離）を測る基準点として道路元標が定められており、高松市にも道路元標が建てられました。

昭和二七年（一九五二）には急激に成長した自動車交通に対応するため、道路法は全面改正され、それに伴い国道の指定も変更され、元標は廃止の運命をたどり、現在となっています。

10 常磐橋 ときわ

高松城の外堀に架かっていた橋で、橋の北側には番所があり、南側には高札場こうさつばがありました。築城当初は土橋としてつくられましたが、その後木造の橋に架け替えられました。



図7 高松市道路元標

城下町から各地に通じる五街道の起点となつた重要な橋で、南に丸亀町から仏生山・金比羅街道へ、東は片原町から志度・長尾街道へ、西は兵庫町から丸亀街道へ通じていました。

外堀は明治に入ってから少しずつ埋め立てられ、橋も石橋に架け替えられました。明治三三年（一九〇〇）には外堀が完全に埋め立てられ、橋は栗林公園の東門に移されました。

11 厩跡 うまやあと

高松三越北側の駐車を発掘したところ、東西三・九メートル、南北五・八メートル、高さ一・六メートル以上の石垣で囲

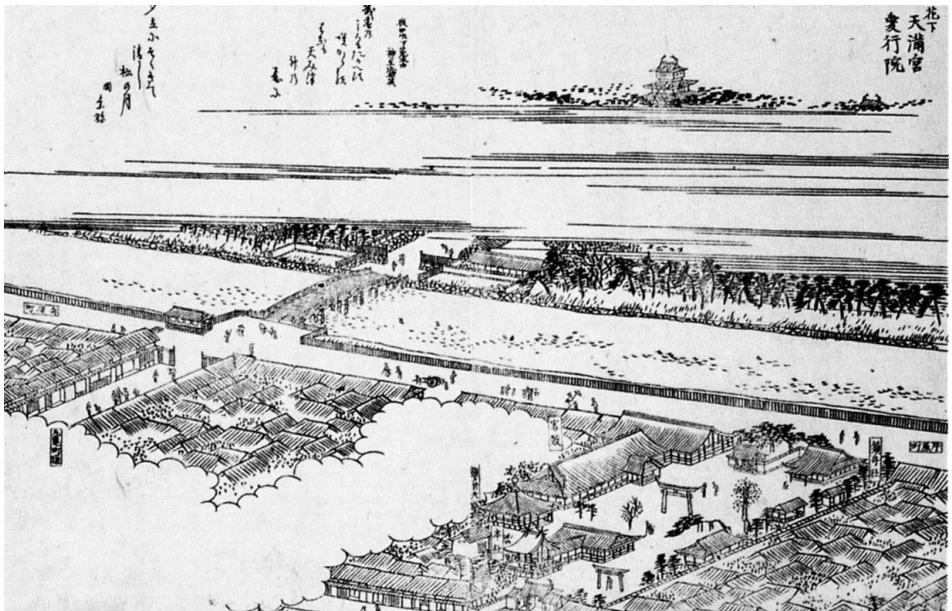


図8 『讃岐国名勝図絵』に描かれた常磐橋・華下天満宮付近

まれた大型井戸が見つかりました。さらに、井戸の南側には昇り降りをしやすくするために、東西七・四メートル、南北二・一メートルの踊り場が設けられており、そこには玉砂利が敷き詰められていました。石垣はすべて花崗岩の割石を使用しており、北西隅の石には○の中に十の記号と扇形の刻印が施されていきました。井戸の主な使用時期は、扇形の刻印が生駒家の家紋であると考えられることや、出土した陶磁器などから、生駒家が治めていた江戸時代初期の頃であったと考えられます。このような特殊な井戸の発掘は高松城内で初めてのことであり、どのような目的で井戸が造られたのか今後の解明が期待されます。一方、この場所に井戸が造られた理由については、中世に埋没した川跡があって伏流水が豊富であったためと考えられます。石垣の隙間からは水が湧き出し、常に五〇センチ以上も水が溜まっていました。

調査地は絵図などから生駒期の末期には「浅田図書」「生駒左衛門佐」の屋敷があり、次いで松平家初期に



図9 厩跡で検出した井戸

は「間嶋半右衛門」「松田庄左衛門」の屋敷があったことが推測されていました。発掘調査でも、松田庄左衛門の弟の「松田庄九郎」の名が墨で書かれた木簡もっかん（荷札）が井戸から出土しており、絵図どおりに家臣たちの屋敷地であったことがわかりました。さらに、絵図によれば江戸時代後半には厩として利用されていますが、そこには「井戸址」という添え書きも見られ、井戸が埋められた後も人々の記憶に残っていたことがわかります。

12 華下天満宮

はなしたてんまんぐう

仁和二年（八八六）に菅原道真が国司として讃岐に赴任した際に、東浜に上陸したが、付近に宿泊するところもなく、長命寺ちやうみやうじ（愛行院あいぎやういん）で宿泊したことから、住持増圭ぞうけいと親交がありました。寛平二年（八九〇）に都へ帰る際には長命寺に立ち寄り、別れを惜しむ増圭に自画像を贈りました。延喜三年（九〇三）二月に道真が没すると、これを聞いた地元住民によって当社が建立されました。

その後、生駒親正の高松城築城に際して河川の流れを防ごうとしたが止まらなかつたので、当社に丸石二五個を納めたところ川の水が止まり、築城が叶ったので、祭田を与えて城の鎮守としました。松平家の治世になりやや衰えていましたが、三代藩主

松平頼豊の信仰があり、大規模な社殿となりました。当初社殿は、現在より二〇〇メートルほど東にあり、時期不明ですが現在地に遷宮したとされており、『讃岐国名勝図会』では頼豊時代に遷宮した可能性を指摘しています。

また、松平家時代には以下のような話が伝わっています。西川藤左衛門久邦が、菅公を信仰し祈願したところ、町奉行与力から御膳番役になり、さらに信仰を深めていきました。延宝元年（一六七三）正月に、藤左衛門が家で居眠りをしていたところ、烏帽子に白衣姿の人が来て、「ただ今菅神御光臨あり、家内を清めて待つべし」と言ったので、心得たと答えてまた眠っていると、また同じようなことがあり、最後にはその白衣姿の人が大いに怒り、「菅神ただ今御出なり、油断なり」と言っているうちに家の門をたたくものがありました。藤左衛門が起き上がり、出ようとすると、「菅神の画像は望みなきや」という声が聞こえ、表に出た時には人の姿は見えず、道真の尊画が置かれていました。藤左衛門は尋常のものではないと思ひ大切に所持していました。それから三年を経たある日、夢に道真が出現し、「ねがわくば花の下なる名に住まん」と唱えたことから藤左衛門が気付き、延宝三年（一六七五）二月二五日に華下天満宮へ納めました。この尊画の表装をやり直すとき、裏書を見ると、「華下神像」と記され

ており、増圭へ贈った自画像だったということです。

華下天満宮は神社としては珍しく北向きに建っています。これは高松城築城時に当社を城の鎮守神としたため、結果的に高松城のある北方向を向いたものです。この特徴を利用して、高松市出身の作家菊池寛は、同郷だと言って金の無心に来る者に対し、この天満宮の向きを尋ねて高松出身であるかどうかを判断したという逸話があります。また、古天神とも呼ばれますが、これは中野天満宮より創建が古いことからそう呼ばれているものです。

かつては広大な敷地を有し、社殿も建ち並んでいました。古天神さんあるいは北向き天神として長く市民に親しまれ、九月二五日の例大祭はもとより、四季を問わず参拝者の多い神社でしたが、昭和二〇年（一九四五）七月四日の高松空襲によって社殿は失われました。戦後まもなく社地の敷地内を闇市のバラックが占めるようになり、戦前の社地もほとんどが失われました。

13 片原町遺跡

生涯学習センター建設に伴う工事の際に、遺跡が確認されました。一五〇一六世紀

を中心とする溝跡、土坑、ピット群が検出されました。特にL字状に検出された溝は、中世の居館の周囲にめぐらされた堀と推定されています。琴電片原町駅東側付近において中世の港湾施設が所在した可能性が考えられており、経済・流通の拠点として発展しており、居館はそれらを支配する小領主のものと考えられます。

14 奉行所跡

琴電片原町駅の東側は絵図によると、江戸時代前半には武家の屋敷地でしたが、後半には奉行所になっていたと推測されていました。発掘調査では、奉行所のものと考えられる礎石や堀が見つかりました。礎石は、安山岩の平坦な自然石を使用して整然と並べていました。そのうち南側の建物は、東西約三・九メートル、南北約五・九メートルと考えられ、この建物の周囲には割石を敷き詰めた溝がめぐらされており、非常に丁寧につくられていました。また、北側の建物は東西に



図 10 奉行所跡検出の堀

長い建物がであったと推定できます。一方、堀は調査地北端で東西約一〇メートル分を確認しただけですが、深さ一・六メートル以上、幅約八メートルと推定される大規模なものです。他地域でも、奉行所の周囲に大きな堀をめぐる例があることから、この堀は奉行所に伴うものであると考えられます。

明治時代になると、この地に鶴屋町尋常小学校が建てられていたことが知られており、この小学校校舎の礎石列が発掘調査でも見つかっています。なお、同校に所在した花崗岩製の門柱は、現在、旧新塩屋町小学校門柱として高松市指定文化財となっています。

門は主門とその両脇に付属する脇門の二対四基からなります。門柱は断面長方形で、基底部は土台状にひとまわり大きく、柱の上部四面には浅い六角形の彫込みによる装飾が施され、頂部は四角錐の笠形となっています。地上高三・三五メートル



図 11 高松市指定文化財旧新塩屋町小学校門柱

ル、門全体の幅は七・一四メートルです。鶴屋町尋常小学校（昭和一六年四月に鶴屋町国民学校に改称）の校舎建築が始まった明治三〇年（一八九七）頃に設置されたと考えられています。その後、約五〇年間正門としての役割を果たしてきましたが、昭和二〇年（一九四五）七月四日未明の高松大空襲によって鶴屋町国民学校は校舎が全焼し、爆撃や機銃掃射にも耐えて残ったのは四基の門柱だけだったとされます。同校は昭和二一年（一九四六）三月に閉校となりましたが、二三年（一九四八）四月一日に開校した新塩屋町小学校の正門として現在地に移設され、以後平成二二年三月三日の閉校まで六二年間にわたって威風堂々たる姿で学校を守ってきました。長年の風雪と戦火に耐えて、学校施設と学童の安全を見守ってきた花崗岩製の門柱は、鉄製の門扉や門飾りの取付け・取替え穴が残り、数次にわたる改修を経ながらも、学校の歴史を伝える貴重な遺産として保存されてきたことを物語っています。

15 北濱恵美須神社

当社の御神体については『讃岐国名勝図会』によると、以下のようなことが記されています。沖に出ていた漁師が帰るとき、船の艀かに触るものがあつたので、取り上げ

てみると冠形の小石でした。不思議に思
 いながらも海に投げて、一〇〇メートル
 余り帰ると再び同じことがあり、それが
 三度に及んだため、その石を持ち帰り占
 者に聞くと、神石であり、これを祀れば
 漁業が繁栄すると言われました。漁師た
 ちは石の小祠を建てて蛭子宮と崇め、
 徐々に修造を加えていきました。その後
 諸人の信仰により当初小石であったはず
 の御神体が、修造遷宮の際に二人で抱え
 るほどの大きさになっていたとされます。
 なお、外堀を挟んだ対岸の東浜には東
 浜恵比須神社が所在します。

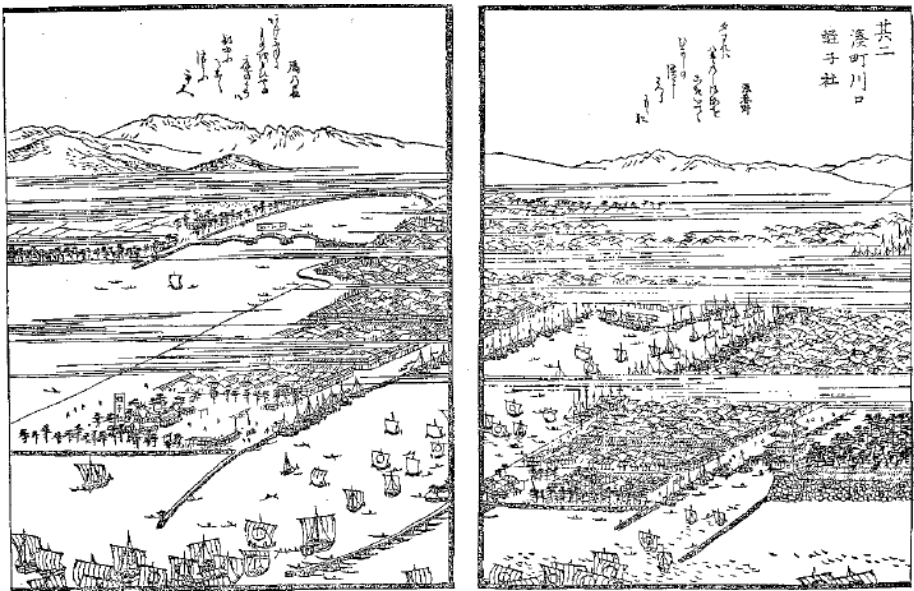


図 12 『讃岐国名勝図絵』に描かれた東浜港周辺

参考文献

香川県教育委員会二〇〇二『香川県埋蔵文化財調査年報 平成一二年度』
香川県歴史博物館二〇〇七『特別展 海に開かれた都市
く高松―港湾都市900年の

あゆみく』

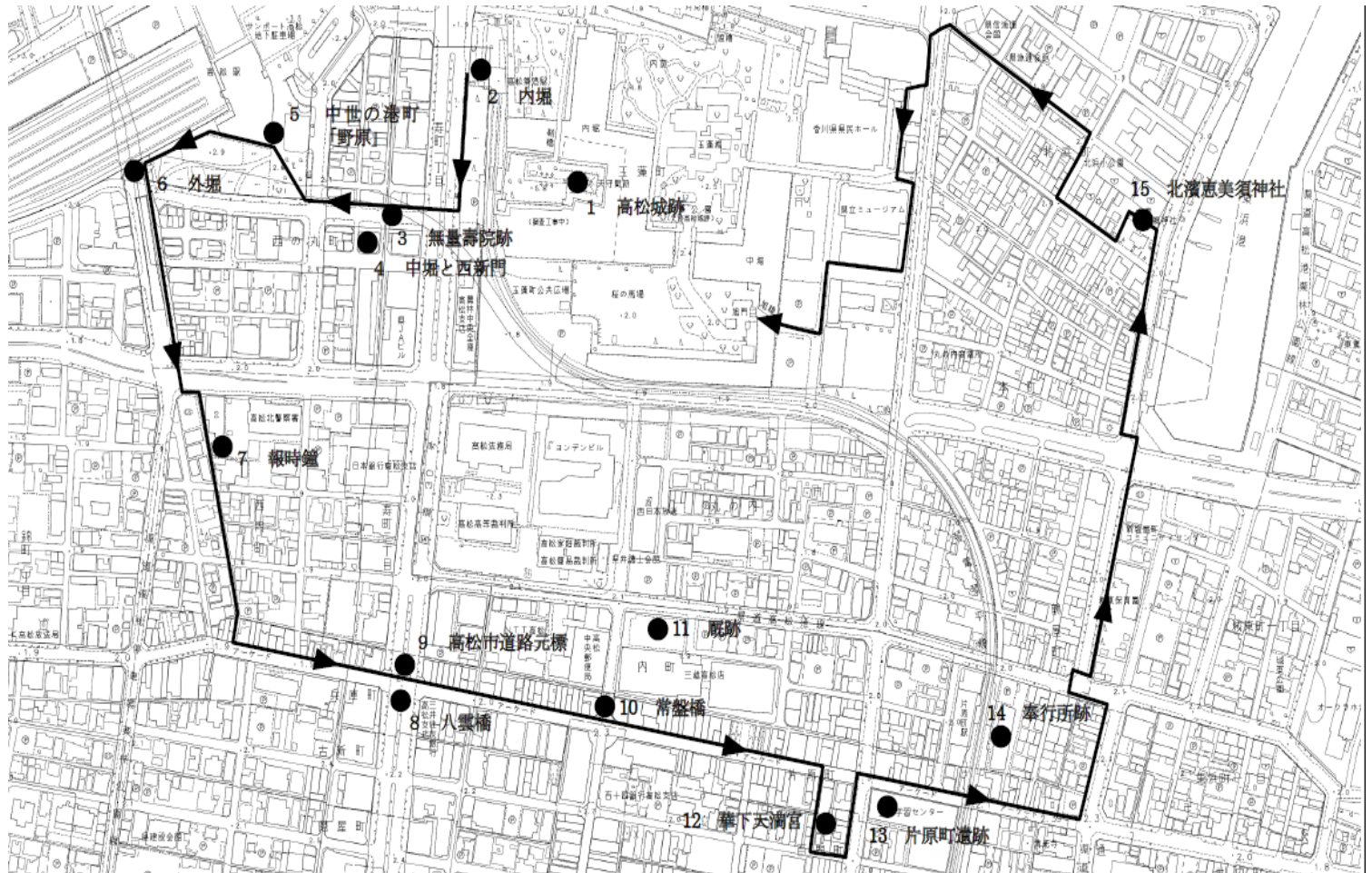
高松市一九六四『新修高松市史一』

高松市二〇一四『史跡高松城跡』

高松市教育委員会二〇〇五『高松城跡（無量壽院跡）』

高松市教育委員会二〇〇五『高松城跡（東町奉行所跡）』

高松市教育委員会二〇〇六『高松城跡（厩跡）』



6 外堀

5 中世の港町
「野原」

3 無量壽院跡
4 中堀と西新門

1 高松城跡

7 報時鐘

9 高松市道路元標

11 麻跡

8 八雲橋

10 常盤橋

12 華下天満宮

13 片原町遺跡

14 奉行所跡

15 北濱恵美須神社

9月27日（日）ことடன்高松築港駅からの復路

◆ことடன்電車 （高松築港） （片原町） （瓦町）
〈長尾線下り〉 12:08 → 12:10 → 12:13 着
〈琴平線下り〉 12:15 → 12:17 → 12:20 着



次回のふるさと探訪は・・・

テ ー マ 屋嶋城跡（浦生地区）と長崎鼻古墳を訪ねる（予定）

と き 平成27年10月25日（日）

9:30～12:00頃

集合場所 ことடன்バス停 健康ランド前

講 師 渡邊 誠さん（高松市文化財専門員）

☆広報「たかまつ」10月15日号に開催案内を掲載します

ので、御覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、

文化財課（TEL839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）で

お知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆ことடன்バス （瓦町） （高松駅） （健康ランド前）
〈屋島大橋線下り〉 8:20 → 8:30 → 8:50 着

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。



- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。